



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第二五四号）

しようしよ
小暑 七月七日

竜宮社

二見興玉神社の境内社に、竜宮社があります。夫婦岩の南側、伊勢シーパ
ラダイスに隣接する海岸に建ちます。

そこでは毎月旧暦十五日に月次祭つきなみさいが行われています。

旧暦による祭典のため、新暦の今なら六月は九日、今月は八日と日は定ま
りません。近頃は新暦に移す祭典が多くなりましたが、ここでは旧暦十五日
にこだわります。なぜなら竜宮社は、今から二百二十五年前の寛政四年（一
七九二）五月十五日にこの地域を襲った大津波の被害者の追悼と郷中（村中）
の安全祈願を込めて江地区えの五十鈴川（現在は派川はせん）河口にお祀りしたのが
始まりとされているからです。

その後、昭和十三年に現在地に遷座され今に至ります。とくに旧暦五月十
五日は例大祭となり、社殿の神事に続いて、「郷中施ごじゅうせ」が行われます。大津
波の被害を受け、かろうじて残った五、六軒の人々が助け合い、村中（郷中）
で施し合って、この水難から立ち直ったことからこう呼ばれます。お供えも
のは、キュウリ・海松みま、まつ菜なで、「津波を急に見るな、待つな」という先
人の教えにちなむものです。小さな船にこれらの供物を乗せ、海浜から流し
ます。この五月に着任した同神社の金子宮司は、

「津波の後に地域の人々が助け合ったことがこうした形として残っている。
東日本大震災より以前から行われていることは、この地域の伝統です」と話
してくれました。

神事には、氏子の江地区、茶屋地区の人々が大勢参集していることに驚き
ました。この日は「ひまち」として、無事であることを祝い、組の人々で食
事に行く習慣が残っています。確かにこの日、休日の看板が二見の店々に出
ていました。水難から立ち直った海辺に伝わる特別な日なのです。

文 千種清美

